

# 東北・春山スキー8日間の旅

(2014年3月)

(39卒) 木村 恒夫

年末に鎌田先輩から東北に春山スキーに行きませんか、長期間であるが天候に依って無理の無い行動をしましょうとお誘いを受け、昨シーズンに山スキー道具一式を更新したばかりでもあり、国内のスキーでは4日間が最高の経験しかなく長期は初めてで面白い計画につき二つ返事で参加させてもらいました。

1月末に作って頂いた計画書を見ると同期の湯浅氏も参加とのことで総数5名で3月15日~22日で出かけることに成りました。

15日伊丹から秋田空港に行く便に搭乗。飛び立って暫くすると眼下に御嶽、乗鞍さらに槍、穂がくっきり見え久しぶりにこの景色を楽しむ。

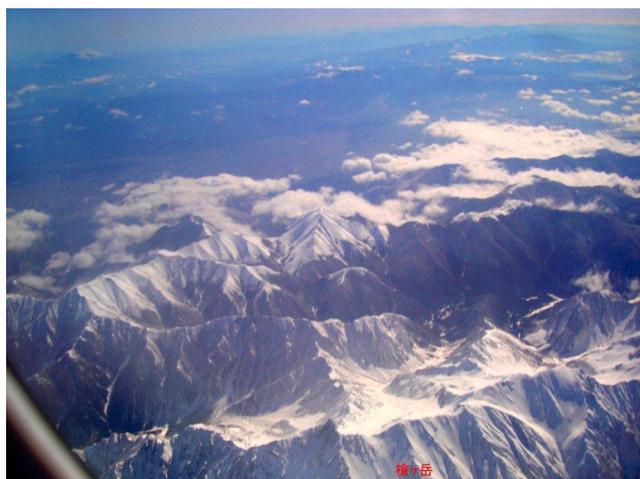
秋田空港でレンタカーを借り、岩手山山麓の綱張温泉スキー場を目指す。

スキー場に併設の休暇村に着くと直ぐに足慣らしのためスキーの準備に入る。

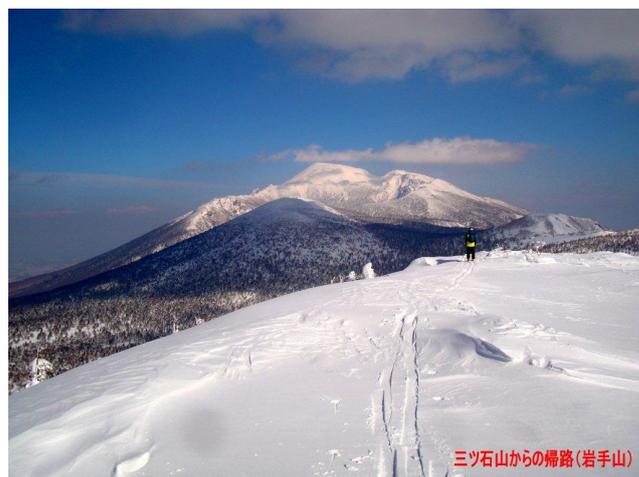
湯浅氏は長い間痛めていた膝も全快される気満々で直前に「これから5,6年は楽しむぞ」と板セット、シール、クランポンを更新され、皆で雪降る中ゲレンデに飛び出す。

16日(綱張スキー場) 天気良ければ岩手山に近い大倉山、姥倉山に登る予定のところ降雪と霧で見通し悪くデコボコ・ゲレンデで新雪(パウダースノーであった)を選んで山スキーの滑降練習を行う(競技が有る為ゲレンデ整備はほとんど成されていなかった)。

17日(三ツ石山) 天気が回復傾向になりリフトが動くのを待って乗り継ぎ中間地点から三ツ石山を目指す。霧が出たり風が強く吹いたりで良いと言う天気では無かったが時々天気回復で岩手山も綺麗に見えたりして三ツ石湿原にある立派な無人小屋に着く。小屋の中で一休みと昼食を取ってから真正面に見える大きな雪尻を避け、左から廻り込んで頂上に至る。



ボンバリディア機から



三ツ石山からの帰路は登って来たルートに沿ってパウダーを楽しみつつ小屋迄快適に滑り下りる。頂上では風強く長居は出来なかったが下ると穏やかになり1か所の登り返しをこなし林道からゲレンデへと滑りこむ。

ゲレンデには頂上リフトの運転終了15:30で要員が下る準備で待っていた。

ガリガリに成っていたゲレンデを下り降り16:00に宿に帰着。

準備済みの荷物を車に積んで雫石スキー場を眺めつつ次の予定地乳頭温泉に向かう。

18日(休養)北秋田は雨の予報であったが高原につき雪に変わるであろうと見込む。

乳頭山の頂上は無理として下見だけでもしておこうと準備万端整えるも玄関を出る成り雨が降り出し無念残念。致し方なく日本100名湯の秘境の宿・鶴の湯に浸かりに行くが雨の中でもあり、気温も低いので入浴は止めにして宿の国民休暇村の温泉に浸かり休養日とした。

19日(乳頭山)夜半に雨から雪に変わった様で良いとは言えないが1日天気が持ちそうなので朝食後早々に準備して蟹湯温泉に車を置き、孫六温泉に向かう。

孫六温泉の少し手前からシール登高を始めるも急な登りであったが森林限界を過ぎると楽に成った。田代平山荘に12時前に到着。風が徐々に吹き出す。

小屋を過ぎてしばらくすると風が益々強く成って来る。新雪は風に飛ばされガリガリの盤となり木々には海老のシッポが大きくふちやくしているが何とか乳首までスキー登り着く。

そこで板を外し吹き飛ばされない様に確保してスボ足で乳頭山頂上に到着。

しばしのピクチャー後気を張って小屋近くまで戻り昼食を済まし滑降に入るが林間になり雪質が最中状で表層と下層が氷状で且つ木が密生していると言う難儀な状況でした。



20日(移動)天気良ければ秋田駒ヶ岳に登る予定のところ朝から雨でスキーは断念し、田沢湖の伝説のたつ子像を見て阿仁スキー場の下見を済まし森吉山荘に移動。終日雨。

21日(阿仁スキー場)森吉山に登る準備をしてスキー場に行くもゲレンデ上部は風速20m以上吹いていてゴンドラは終日運休とのこと。降雪もあるので時間券を買って1本のリフトでグルグル廻るだけの一日でした。

22日(森吉山)最終日につき森吉山頂上に到達出来るか疑問の中、行ける所まで登ろうと濃霧の中ゴンドラに乗って上がるも風は強いし、濃霧であるし、寒さもきつかったので暫く頂上の小屋で待機。見計らって出発するも1,308mのポイント手前で撤退を決めゴンドラ頂上に戻る。

頂上から無念をを晴らす如く一気に滑り降り帰路につきました。



今回の計画は鎌田先輩の長年の企画、実行の経験から編み出された素晴らしい計画でした。今年には特に天気が読めない異常な気象条件の中それなりに山スキーもゲレンデ・スキーも楽しめ、朝夕温泉につかり、食事はバイキングで好きな物が食べられ大変満足致しました。

この記事を読まれ参加したいと思われる方はここに出ている誰彼かに連絡されたらと思います。

歳を忘れて日頃精進して何時までも続けて行きたいと思っている次第です。

鎌田先輩には何かと感謝するばかりです。

以上